

家族構造の変化

幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどこもその不幸のおもむきが異なっているものである。

レオ・トルストイ『アンナ・カレーニナ』

家族は普遍的現象であり、家族の概念はおそらく社会生活における最も基本的なものである。

しかし、家族の姿には多様な形態と機能がある。家族の役割に対する認識は、社会と文化によって異なる。家族に対する単一の見解はなく、普遍的に適用される定義もない。まさに、家族の主な特性の一つはその多様性である。

社会的、政治的および経済的状况の変化に従って、地域内および歴史的な家族の形態は変化してきたため、単体の家族について語るよりも「家族たち」について語るほうがしばしば適切である。

歴史的にほとんどの文化において、家族は父系かまたは男性優位であった。男性優位の家族の一例は旧約聖書での家族の記述であり、そこでは男性氏族長は複数の妻と妾をもつことが許されていた。原則として旧約聖書の女性の地位は低かった。

古代ローマでも家族は父系だったが、複婚は行われておらず、女性はより良い地位にあったが自分自身を管理することを許されていなかった。ローマ人の家族は拡大家族であり、家父長には息子を殺す権限さえあった。

中世ヨーロッパでは、家族はローマカトリック教会の慣行と封建主義の影響を受けた。一般的に拡大家族で男性優位であった。対照的に、同時期のイスラム教の女性は個人財産をかなり管理していた。

産業革命は家族構造の大変化を生じさせた。工業化と都市化は大きな荘園を破壊し、生活・仕事のスタイルにおける著しい変化を促した。多くの人々、特に未婚の青年が農場を去り、工場で働くため都市に移った。こうした過程は多くの拡大家族の崩壊をもたらした。

同時に、家父長制は徐々に男女平等に道を譲った。家族内での男性と女性の役割の定型化は崩れた。もはや家族と子の世話は女性だけの義務ではなくなり、生活の糧を稼いで公的生活を追求することは男性だけの領域ではなくなった。多くの妻が家庭外での仕事を始

め、多くの夫が家庭の維持に関わる義務を分担しはじめた。

変わりゆく家族

このような家族構造の変化は今日も続いており、家族は世界中で急速に変化している。こうした変化は地域ごとに異なるが、共通の特徴がいくつかある。小規模な核家族、家族成員の寿命の伸び、価値観の変化による家族内の関係の変化である。

その他の変化も進んでいる。正式の結婚はその地位を失いつつあり、離婚はそれが可能なほとんどすべての国で増加した。現在、全家族の三分の一は、女性が世帯主であるひとり親家族であると見積もられている。

家族構造の伝統的定義は、二つの主要タイプ——核家族と拡大家族——に基づく傾向がある。しかし、これらは変化しており、新しい家族タイプも現れつつある。

多くの国で社会がますます工業化・都市化されるにつれて、拡大家族は核家族に取って代わられている。そして、男女平等の進展、育児を支える新技術、および女性に独立した生計源を提供する経済変化によって、核家族自体も変化している。

同時に、同棲、同性関係、ひとり親家族、および再編家族など非伝統的な家族タイプがますます一般的になっている。

核家族と同棲

現代の西側諸国の家族は、親と子の二世帯が同居する核家族をつくる傾向にある。子が去っても、「空の巣」は核家族と見なされる。統計は、核家族は寿命の長い諸国でより一般的であることを示している。

核家族は、容易に転居できて広い住宅を必要としないため、都市化社会に適している。核家族にはいくつかの利点がある一方、限られた家族成員数のために内外の圧力に対して弱い。

社会的価値観のより全般的な変化——結婚ばかりではなく、離婚、婚外子および中絶に対する新しい姿勢——から、1970年代に同棲が現れた。例えばヨーロッパでは、少なくとも子が生まれるまでは結婚しない同棲が増えている。

調査によれば、同棲は様々な理由で選択されている。独身者では、試験結婚または結婚反対と長期的誓約の拒否が同棲の理由に挙げられている。結婚経験者では、同棲は、再婚の猶予期間が必要な場合、またはパートナーの一方が以前の不幸な結婚生活の後に新たな

法的誓約を希望しない場合に生じる。

25歳以下の若年成人は、同棲女性の最大比率を占める人口集団である。最高率はスカンディナビアに見られる。1980年代までにノルウェーでは20～24歳の年齢集団の女性の28%、デンマークでは37%、スウェーデンでは44%が同棲していた。また、データが入手可能なすべての国で、より高い年齢集団でもかなり増加している。

同棲は結婚の序奏の場合もある。例えば、米国で1980年代に結婚したカップルの半数近くはそれまで同棲していた。

さらに多くのカップルが同棲するにつれて、婚外出産が増加している。それは1988年にドイツ連邦共和国で全出産の16%、1988年にフランスで26%、1989年に英国で27%、1990年にスウェーデンで47%を占めた。

ひとり親家族と複婚家族

ひとり親家族は、配偶者の死亡、離婚、別居、遺棄、またはパートナーが同居しない決定によって形成されている。こうした家族はその経済状態において大きく異なるが、しばしば二親家族に比べて資源が限られている。

ひとり親家族は主に、女性が世帯主である。実際、全世界の3世帯のうち1世帯は女性が唯一の稼ぎ手である。しかし、男性が世帯主であるひとり親家族の数は、西側世界で増えているように思われる。これらは一般的に、女性が世帯主である世帯よりも良好な経済状態にある。女性勤労者は低賃金である傾向にあるため、女性が世帯主である家族は経済的に脆弱な傾向にある。

ひとり親家族は公共機関の援助を必要とする。だが、ほとんどの国の法制度と政策は社会変化に遅れをとっており、非伝統的な家族に対する援助を欠いている。世界中のひとり親家族の増加は、政策決定者に大きな課題を提示している。

多くの社会で、結婚は複婚であり、一人の男性が数人の女性と結婚し、まれに、一人の女性が数人の男性と結婚する。複婚は例えばアフリカの多くの地域で文化的に受け入れられており、そこでは経済的手段を持っていれば誰でも実行できる。北アフリカでは全婚姻の約7%が複婚であり、中央アフリカでは10～25%である。西アフリカでは複婚は女性の約30%に関与している。

一部の複婚家族で、妻たちの一部または全部（および時には夫）が配偶者と同居しないことがある。また、家族の住居が必ずしも子の住居ではない。一人の家長の下で婚姻関係

にある複数の家族単位が生活することもある。

拡大家族と親族家族と部族家族

世界の多くの地域で、家族はともに拡大家族を構成する複数の家族「分子」の組み合わせである。拡大家族は大規模である必要はない。例えば、祖父母が孫と同居している場合には小規模である。しかし通常、拡大家族とは、同居しているかまたは頻繁で親密な相互作用を有する多くの人々を指す。

拡大家族の一般的形態は、祖父母、親および子が同居する三世代家族である。老人に対する尊敬と世話を重視する文化は、三世代家族を最も望ましい家族形態と見なす。

土地およびその他の財産の分割が全家族成員の経済的可能性を損なう場合、こうした家族がしばしば存在する。そのため、三世代形態は農村部でより多く見られる。

都市においては、住宅不足が増大し、多くの若いカップルが親と同居する他に選択肢がないため、一種の強制的拡大家族を生み出している。こうした場合、この拡大家族は別の住宅が入手可能になれば分離するため、一世帯に二つの核家族があると見るのが一般的である。

かつては拡大家族は農村に、核家族は都市に多く見られた。しかし、世界の多地域で逆現象が起こっているようである。小さく区分された土地の生産限界は大家族の自助能力を低めているため、農村は核家族になりつつある。そして都市は、経済悪化と個人の機会の欠如に対処する生き残り戦略として拡大家族単位で構成されつつある。

親族家族はさらに大きな単位からなる。三世代に加え、(叔父、叔母、いとこなど)その他の親戚が同じ世帯に属することがある。

一部の西側諸国では、人々は結婚する代わりに、複数の核家族と独身者が同居する相互支援共同体で生活することを選択する場合がある。一人以上の女性の子を世話する複数の夫婦または女性小集団の世帯もある。

部族家族は、さらに広い規模で、通常は生物学的基盤ではなく社会的基盤に基づいて構成される。育児責任を数人が引き受ける場合もある。生物学的母親の姉妹が母親と呼ばれ、父親の兄弟が子の父親役を演じる場合もある。いとこがすべて兄弟姉妹と呼ばれる場合もある。この種の家族は親が大勢いるため、子を放置することはめったにない。

再編家族と移住家族

あらゆる家族形態において、以前のパートナーによる子がいる者の結婚、再婚および同棲によって家族の再編が生じる場合がある。

慣習法の下、再婚または同棲にはいくつかの形態がある。配偶者の一方または双方に、同居しているかまたは同居していない子がいる場合もある。配偶者に子がいる場合も子がいない場合もある。このように、子に数名の半姉妹と半兄弟、「半祖父母」およびその他の非生物学的親戚がいる場合がある。

結婚、再婚および同棲の現在の割合をみて、再編家族は多くの社会において最も重要な新しい家族グループであるという人々もいる。

1980年代には国際的移住が再発生した。伝統的な移民国のうち、米国は1985～1989年に300万人以上の永住移民を受け入れた。ヨーロッパでは欧州共同体の12カ国が1,300万人以上の外国人を受け入れたと見積もられており、そのうち約60%は共同体以外の出身である。主に南アジアと東南アジアからの外国人数百万人がペルシャ湾の石油産出国で働いていた。

全体として、7,000万人の人々が祖国以外で（合法的または非合法的に）働いている。さらに、多くの家族が戦争または迫害により祖国を追われた。その結果、移住家族はますます一般的になっている。こうした家族は、文化の変化、困難な調整過程、および家族内の人間関係の急速な変化という重荷を負わなければならない。

しかし、移住家族はまた、家族がアイデンティティを確立し、親近感と情緒を育くみ、そして危機において援助を提供するものであることを最も明確に示している。移住家族は、今日の世界における家族の重要性を証明している。

家族の活力と回復力

家族構造におけるこれらの根本的变化は、衰退の徴候と見られることもある。しかし、直面する多くの圧力と課題にもかかわらず、家族制度は目覚ましい活力と回復力を示してきた。新しい形態の家族生活は、家族の価値の浸食を示しているというよりも、現代世界の課題に対処するべく発展しており、個人の権利と社会的責任の均衡をとるためのより効果的な方法を模索している。

家族構造の多様性はしばしば、国連により強調されてきた。例えば、国際家族年に関する1991年の決議において国連総会は、「様々な社会政治的・文化的システムにおける家族の

多様な概念の存在」を認めた。

実際、各国政府、政策決定者および市民における家族に対する正確な理解を促すことが、国際家族年の目的の一つである。

家族の形態

核家族	拡大家族	再編家族
生物学的	三世代	再婚
社会的親族	共同体生活	
ひとり親	部族	同性 ^a
養子 ^b	複婚 ^a	
試験管 ^a		

^a限られた国のみで合法

^b合法的養子縁組が承認されている国

出典：

Family: Forms and Functions,
Occasional Papers Series, No.2, United Nations,
Vienna 1993.